表7　介護意識の得点

	N	最小値	最大値	平均値	標準偏差
介護意識	92	1.70	3.71	2.6931	.3412
第1因子	92	1.25	4.00	3.0480	.6169
第2因子	92	2.00	4.00	2.6123	.4208
第3因子	92	1.00	3.50	2.3315	.5522
第4因子	91	1.00	4.00	2.5714	.9327

転項目については数値を反転させる。つまり、「介護上望ましい」と考えられる項目に対して「大いに賛成」の場合に4点を与え、「介護上望ましくない」と考える項目に対して「大いに反対」の場合に4点を与える。表5において網掛けしてある部分は望ましいと考える回答である。そして採用された11項目の点数の平均点を求めて「介護意識」の点数とする。その得点によって、「介護意識」の強さを測定する。

以上の手順を踏んで計算した結果は表7の通り介護意識の平均得点は2.7（標準偏差＝0.34）である。また、第1因子の平均得点が3.05（標準偏差＝0.61）で最も高い。つまり、第1因子である「高齢者を介護する仕事に関する受け止め方」に対しては好意的な答えが比較的多い。但し、標準偏差も比較的高いことから、個人によってばらつきが大きいことが分かった。また、第4因子の標準偏差もかなり大きい。すなわち、職員の「老人ホーム職員の専門性・独自性の受け止め方」についても、個人のばらつきが大きい。

6　因子間の相関：

各因子の得点の相関は表8の通りで、「第1因子」と「第3因子」との間に有意な相関がみられる以外、他の組み合わせにおいては、有意な相関関係がみられない。つまり、因子間は相互にあまり関連していない。また、「介護意識」については「第1因子」と「第3因子」はかなりの相関を持っているが、「第2因子」とはわずかな相関しかみられず、「第4因子」とは有意な相関さえみ出せない。そこから、「第4因子」である「老人ホーム職員の専門性・独自性の受け止め方」は他の因子と違う性質をもつと考えられる。

（5）変数間の関係

1　相関関係

1－1　主観的指標の間の相関関係

「老人観」と「介護意識」の得点と、現在の仕事に対する「満足度」、就職当時の「希望度」との相関関係を考察してみた。結果は表9の通りである。「介護意識」と「老人観」の間に有意な正の相関がみられる。つまり、高齢者に関する正しい知識やイメージが多ければ多いほど、介護意識が高くなる傾向がある。また、弱いけれども、「満足度」と「希望度」の間にも正相関がある。就職時に強く希望した人が現在の仕事に満足している傾向はある。しかし、「満足度」と「介護意識」の間には負の相関がみられる。つまり、「介護意識」が強い人ほど現在の仕事に後悔している傾向にある。

1－2　客観的指標との相関関係

さらに、「老人観」、「介護意識」と客観的指標と

表8　因子間の相関関係

		第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	介護意識
相関係数	第1因子	1.000				
	第2因子	−.011	1.000			
	第3因子	.369**	.000	1.000		
	第4因子	−.122	.138	−.148	1.000	
	介護意識	.798**	.364**	.665**	.159	1.000
有意確率（両側）	第1因子	.				
	第2因子	.917	.			
	第3因子	.000	.997			
	第4因子	.248	.192	.161		
	介護意識	.000	.000	.000	.131	